

教職の魅力

樋渡 美千代（山形市立第十小学校校長）

今年度も「教職の魅力創造プラットフォーム会議」に参加させていただきました。年間を通じて様々な会議に参加しておりますが、私が一番楽しみにしている会議の一つです。教師という仕事に携わり長い年月が経ったわけですが、この会議に参加すると、高校生や大学生、大学院生の意見を聞いたり、委員の皆さんと議論したりすることで、もう一度自分が教師になったばかりの頃の原点に立ち戻ることができます。

今年もまたこの原稿執筆を依頼されましたが、今回はいつもとは少し違う視点から書いてみたいと思います。

現在私が勤務する山形市立第十小学校では、毎年9月になると、山形大学をはじめとするいくつかの大学の教育実習生を受け入れています。今年も4名の実習生が来て、教材研究をしたり授業をしたり、子どもたちと遊んだり話をしたりして1～4週間の時間を過ごしていきました。初めは緊張でいっぱいの実習生も、実習が終わるころには一回りも二回りも成長し、「これからも頑張っって教師になります」という決意を述べて去っていきます。今回は、その中の1人であるAさんの話をしたいと思います。

Aさんは、山形大学の3年生。教師になることを夢見て大学で学んでいます。教育実習の最終日には、担当するクラスの子どもたちにカードに書いたメッセージをプレゼントしてくれました。ある保護者の話によれば、その方のお子さんは、一人一人にこんなにメッセージを書いてくれるなんてと感動し、ずっと宝物にすると机の奥に大切にしまっているそうです。Aさんは、子どもたちの頑張る姿が見たいと、実習後に開催された運動会も見に来てくれました。また、大学のスクールサポーター事業を活用し、現在も週1回学校に足を運んでくれています。「今日は1年生お願いします」「今日は支援学級お願いします」「今日は4年生お願いします」日によって様々な学級に入っては、学びに戸惑う子どもがいれば、その傍らで子どもの学びを優しく見守ってくれています。

先日そのAさんに教師になろうと決めた理由を尋ねてみました。すると、こんな返事が返ってきました。「小学生の頃からそういう気持ちはあったのですが、決定的になろうと思ったのは、中学生の時です。私は自分が卒業した小学校で職場体験をしました。それまで、教師という仕事は、人に勉強を教える仕事だと思っていました。ところが、学校は、教えるだけではなく、日々の様々な場面で自分自身が学べる場であると感じました。その後、教育実習や、スクールサポーターを経験し、その思いはますます強くなっています。学校は、大人の社会では学べないことを子どもたちからたくさん学ぶことができるんです。そこで自分とは違う発想と出会えるのがすごく面白いと思って...」

このAさんの話を聞き、結局Aさんは、学ぶこと自体がすごく好きなのだと感じました。教師になる動機として、魅力ある学びや魅力ある教師との出会いというのはもちろんあると思います。しかしそれ以上に、学ぶこと自体に面白さを味わえる人材を育てることが、最も大切なのではないかと気づかされました。会議でも話題になりましたが、教師の仕事は大変です。しかし、たとえ99%大変でも、1%の何にも代えがたい魅力があります。近い将来Aさんが教師となり、その魅力を味わってくれることに期待したいと思います。